

---

書 評

---

Noel Leo Erskine, *From Garvey To Marley:  
Rastafari Theology*

University Press of Florida, 2005. pp. xvi+ 224. Pbk. \$24.95.

上間 励起

1930年代にジャマイカで発生したラスタファリアニズム運動は、土着キリスト教とアフリカ帰還を唱えたマーカス・ガーヴェイの思想が融合して生まれた宗教運動である。本書ではマーカス・ガーヴェイから、レゲエシンガーにしてラスタファリアンであるボブ・マーリーに至るまでのラスタファリアン神学の歴史・系譜を宗教学的、社会学的コンテキストから分析する事を中心に据えている。本書の著者で、エモリー大学神学科並びに倫理学科准教授であるNoel Leo Erskineは、前著作である*Decolonize Theology: A Caribbean Perspective*の論理・分析を拡大することを本書の課題とし、カリブ地域における神学の「植民地的地位」からの脱却を目指し、これを著者自身の研究課題の一部に成り得ると認めている。本書の構成を俯瞰すると、様々なラスタファリアニズム研究者の議論を批判的にも肯定的にも採り上げながらラスタファリアニズムの歴史的・神学的推移を捉えなおすことで、そこから生じる新たな問いに著者独特の視点から応答している。本書を評するにあたり、構成とその内容を概観した後に論評することとしたい。本書の構成は以下の通りである。

Preface

1. Rastafari Theology
2. The Social Context
3. The Origins of Rastafari
4. Organization and Ethos
5. Using Garvey to Go beyond Garvey
6. Reggae and Rastafari

Conclusion. Identity and Salvation

第一章で著者はまず始めに、ラスタファリアニズム運動の根底にある「抵抗」という要素を取り上げ、この運動以前に起こったジャマイカにおける奴隷反乱の歴史と、当時のキリスト教布教以前から保持され続けていた奴隷の信仰を、Leonard Barrettの古典（*The Rastafarians*, 1997）を引用しながら分析する。主にアフロジャマイカンのルーツの一つであるアシャンティ人がアフリカ

から持ち込んできた死霊信仰をジャマイカで発展させたのが、オベア（Obeah）とマイヤリズム（Myalism）である。著者はBarrettの分析をもとに、何故これらの信仰が奴隷制下で繁栄したのかを検証する。オベアを実践するオベアマンは、主に呪いをかける呪術者とみなされ、マイヤリズムを実践するマイヤルマンはその呪いを中和する力を持つと信じられている。アフリカの伝統的な儀礼司祭は、自ら所属していた環境と異なる外部の社会では、その霊力を失うと見なされており、しばしオベアマンの儀礼に参加・協力することでその力を回復し、奴隷社会においてもその力を維持する事が出来たと著者は論じている。またマイヤルマンは呪いを中和する力を持つという信仰から、白人がかけた「奴隷制」という呪いを中和するという信仰も生まれ、実際奴隷反乱を指揮した中心人物は、カリスマを持ったマイヤルマン的存在としてその支持者・参加者に崇められたという。そのような背景を踏まえ、著者は1798, 1830, 1840, 1860年の奴隷反乱を挙げ、それらの反乱には土着キリスト教の影響も非常に大きな要素であったと述べている。ジャマイカへ宣教した最も有名な人物とされるジョージ・ライルはアメリカからジャマイカにやって来た奴隷出身の黒人宣教師であった。彼は1783年に最初のバプテスト教会を立ち上げ、アフリカの伝統的な実践儀礼であるドラミング、ダンス、手拍子を採用し多数の信者を増やす事に成功した。これらの影響でクリスチャンに改宗した人々が引き起こしたリヴァイヴアル運動をきっかけに、奴隷の心性が変化（自由への意思、キリスト教的終末論など）し、様々な反乱を引き起こしたと著者は指摘している。

章の最後にマーカス・ガーヴェイのバイオグラフィーと、アフリカ回帰思想、それを強化する戦略としての万国黒人委員会（UNIA）設立とその社会活動を分析し、それらがジャマイカの黒人社会に与えた影響——特に、彼の支持者達に残した「新しき黒人の王が誕生するアフリカを見よ、彼こそが我々の救い主である」という預言——の重要性を5章への布石として論じている。ラスタファリアニズムを提唱しこれを広めたのは主に4人のガーヴェイ支持者であったという事に異論はない。レナード・ハウエル、ジョセフ・ヒバート、ロバート・ハインズ、アキバルド・ダンクリーは、ガーヴェイが主張した「我々のレンズを通して神を見ること」の重要性を強調し、その眼差しがエチオピアに向けられている事をアピールした。ここで著者の興味深い視点は、ラスタファリアンから見たガーヴェイだけでなく、ガーヴェイから見たラスタファリアンである。ガーヴェイは、ハイレ・セラシエ1世のエチオピア皇帝としての成功を願いつつも、改宗することなく福音主義クリスチャンの信仰を貫き通した。むしろ彼は、ラスタファリアニズムは人々を誤った方向に導くカルト集団であると見なし、イタリアーエチオピア戦争時のハイレ・セラシエ1世の政治的行動を痛烈に批判したのである。この段階でラスタファリアニズムとガーヴェイの思想に溝があることは明らかであるが、それにもかかわらずガーヴェイは預言者としての地位を確保されたままである。著者はこれを一定の業績、すなわち、ラスタファリアンに叡智を与えたバプテスマのヨハネとしての地位を認めるには十分にその条件を満たしているからだと論じている。

第二章では、社会的なコンテキストからラスタファリアニズム思想の中心的要素を分析している。最初に著者は、ラスタファリアンを「白人のエリートや、カラード（白人と黒人の混血）から忌み嫌われている下層階級の最下層である黒人から出現した人々」だと定義している。実際彼らはガーヴェイを預言者と認めつつも、無批判に受け入れられているわけではない。ガーヴェイ

のイデオロギーの中心にある黒人資本主義は、階級差別や人種差別を生み出す「バビロン」の産物であるとしている。彼らは当時のジャマイカに蔓延していた極貧、無力、無気力などは植民地主義の悪弊である政治的ペテンなどの結果であるとし、これを旧約聖書からの引用で「バビロン」と呼んでいる。ここで著者が特筆する点は、彼らがこれだけの社会状況に嘆きつつも、精糖工場や農場で働く人々がしばしば起こすようなデモ行進や暴動に一切感知しなかった点を挙げている。初期のラスタファリアンは、ジャマイカは「バビロン」であり、もはや変革不可能なレベルに達しているというある種の絶望感からエチオピア——ハイレ・セラシエ1世が世界中の黒人に救いの空間を与える場所——への帰還が唯一の救いであるとしていた。著者は、初期のラスタファリアン神学・哲学において、「バビロン」は変革不可能なので滅ぼされるべきであるとする立場がとられたことや、ジャマイカ社会に対してアンチテーゼを投げつけながらも、全く何の社会的行動を起こさなかったことから、行為と発言の矛盾点を明らかにしている。また、ガーヴェイのラスタファリアニズム批判はこの非実践的思想にあると述べている。

著者は初期のラスタファリアニズムの信仰世界を捉える手立てとして、7つの思想的枠組みを提供している。第一に『ヨハネの黙示録』5章5節をベースとした皇帝ハイレ・セラシエ1世への信仰、第二に預言者マーカス・ガーヴェイ、第三に抑圧への抵抗、第四に聖地エチオピア、第五にアフリカへの帰還、第六にイタル (Ital) ——すなわち自然への態度、第七に神学的判断・推理の方法を挙げている。これらは本書全体において言及されており、著者のラスタファリアニズム理解の中心であると断言してもよいであろう。

この章末で、著者はObiagele Lakeの*Rastafari Women: Subordination in the Midst of Liberation Theology*を挙げ、ラスタファリアニズムにおける女性の地位に関して考察を行なっている。ラスタファリアン神学においては、女性は男性より劣っているという位置付けが基本であり、それは伝統的な家父長制度に結びつくもの、または聖書からの根拠であるとされている。著者はLakeの男性的シンボリズムに関する議論を踏まえつつ、ラスタファリアンが主張する「清浄さ」という概念にも着目する。これは、『レビ記』に記述されている法に依拠しており、例えばラスタファリアンの主張において生理中の女性は「不浄」であり、集会のみならず家事一般に関してもその行動が規制されるという。ラスタファリアンの女性に関する議論は結論で詳細に検討されるが、そこで著者はこれらの事例をもとに、共同体における女性観やその信仰世界における位置付けを再吟味し、新たな形での問いを発している。

第三章では、最初にラスタファリアニズムの提唱者であるレナード・ハウエル、ジョセフ・ヒバート、アキバルド・ダンクリー、ロバート・ハインズの4人と、彼らの思想と布教活動を分析している。著者の中でもレナード・ハウエルこそが、最初にハイレ・セラシエ1世がジャマイカ黒人の救世主であり希望であるとする思想を提唱した人物であると指摘している。ハウエルはガーヴェイ主義者を主張しつつ、黒人は白人よりも優れていると確信し、英国への服従よりもハイレ・セラシエ1世を礼賛しアフリカ帰還の準備に着手せよと切論した。彼の功績は、ピナクルと呼ばれる信仰共同体を形成し、人里離れた山奥へ住み着き自給自足の生活を行なったことから、後に出現する様々なラスタファリアン共同体に共同体運営の基礎を与えたとして認められている。

初期のラスタファリアニズムの信仰は、救世主とラスタファリアンに関する記述を聖書から抽出することに集中していた。彼らにとって、聖書は黒人によって書かれた黒人に関する書物であ

らとしている。著者は彼らの聖書の扱い方に焦点を当て、その独特の信仰世界のメカニズムを明らかにしようとしている。まず、ラスタファリアンの聖書解釈法は、キリスト教会のコンテキストの外部から発生するとしている。実際ラスタファリアンは教会に批判的であり、カリブの教会はヨーロッパや北アメリカ教会の延長であると認識し、ジャマイカで蔓延する貧困や苦難を慰撫するものではないとしている。また、教会の内部構造はブルジョワジーの体現であり、教会の聖書解釈はその階級の神学的・釈義的関心を示しているだけにすぎないと主張している。著者は、ラスタファリアンの聖書の読み方や解釈法は歴史批判的手法ではなく、自らの共同体を取り巻く環境から出発すると指摘している。この様な背景から、新聞などの社会的なテキストを聖書のテキストに重ねて咀嚼することで信仰を形作ることを可能にしているのである。

この章末で著者はラスタファリアン神学の核を成す「I&I」の意識に言及している。これは主体を表す「I」と、救い主Jahであるハイレ・セラシエ1世の1を「I」と捉えることで「私とJah」、すなわちWeと同等の機能を持つ代名詞としてラスタファリアンに使用されている。またしばしば「I」は聖別され、Irie（心地良い）やItalなどの単語も「I」に影響されている。この「I&I」こそが、ハイレ・セラシエ1世死後のラスタファリアン神学の変容に非常に大きな役割を果たしている」と著者は述べている。

第四章では、ラスタファリアン共同体におけるエートスについて論じている。著者はまず、ラスタファリアン神学に言及する際に、共同体における教義的枠組やその世界観・宇宙観、更に生活様式を規定するような運用体系は存在せず、メンバーそれぞれが行なう聖書に関する議論からのみ神学が更新されていくと注意を促している。これはヒエラルキーに対するアンチテーゼであることが指摘できよう。ラスタファリアンの主張によると、西洋のコンテキストでは、神と人間の関係について語る際には常に「教会」という第三機関が介入し、それ無しで信仰は成り立たないとしている。著者はこの言説に対し、ジャマイカ国家と教会の関係が緊密であるという事実と無関係ではないと指摘している。彼らは教会の書物である聖書を信仰の基盤とし、それを個々人の視点から類比推理的に解釈しているが、それでもなお教会の聖書専有はヨーロッパ中心主義であり、「バビロン」からの脱出（exodus）を目指すラスタファリアン神学とは正反対にあると講評している。しかし著者は、ジャマイカの土着パプテスト教会やリヴァイヴァル派に関しては、ラスタファリアニズムと非常に近い関係にあると述べている。人類学者のBarry Chevannesも議論しているが、土着パプテスト教会は奴隷出身であるジョージ・ライルによって設立され、多数のアフリカの儀礼を採用しており、そこにマイヤリズムの影響も見られるほど非西洋的、すなわちアフリカ的な教会である。ラスタファリアニズムにおいては、ハイレ・セラシエ1世とアフリカが「真実」として捉えられているために、もはや土着パプテスト教会やリヴァイヴァル派に中心的な「聖霊」に関する議論の余地はないと見なされているが、それでもその開放的な共同体運営の類似性は驚くほどであると著者は述べている。

著者は章の後半で、ラスタファリアニズムの自然に対する認識について議論を進めている。彼らの神学における自然とは、「自然」に生きるということではなく、人間と母なる地球との有機的な関係性に注意して生きるということである。彼らにとっての神は、自然性そのものであり迷信や想像上の産物ではない。地球は神聖であるという認識と、それが人間に完全性と癒しを与えているという認識から、肉食主義などのエートスを生み出したと著者は指摘している。これと同

様に、ラスタファリアンの重要なシンボルであるドレッドヘアーに関して著者は、自らの経験から1940年代後半から50年代にかけてドレッドヘアーのラスタファリアンを見たことはない述べ、またハウエルも同様にそうでなかったと指摘している。ドレッドヘアーは、ラスタファリアンが神学を形成させる過程で発生したと推測している。Chevannesも示唆しているが、初期ラスタファリアンは神のアイデンティティの問題を解き明かす事を第一の目標としていた。自身のアイデンティティや、アフリカ人とアフリカ人の子孫の救済について議論する際の出発点になったのが神のアイデンティティとされる。神をイメージする際に、聖書の記述にある「ユダのライオン」という箇所から雄ライオンの鬣を意識し、それを模倣する事で神と自身（I&I）の関係性をより深めたと著者は指摘している。

第五章では、マーカス・ガーヴェイを通じてラスタファリアンがどの様に神学を発展させていったのかを論じている。まず著者は、ラスタファリアニズムは「解放の神学」であるというLakeの主張の再考を促している。また「解放の神学」の神学者であるJames Coneを挙げ、彼が黒人救済を基盤とした「黒い神」を信仰していることからラスタファリアニズムとConeの神学の部分的一致を認めつつも、Coneの神学は教会内で発生するもの——すなわち白人神学者の影響を含むもの——としている。ラスタファリアンは例え聖書を信仰の根本的基盤として使用しても、神学は常に教会の外部で派生したそれはガーヴェイの訓戒と緊張関係にあると指摘している。Coneとラスタファリアンが、ガーヴェイと彼の強調する「黒人の向上」という概念を信仰の核としているために、著者はガーヴェイに立ち戻る必要があると主張し、彼の思想形成の過程と当時のジャマイカの社会的状況——すなわち砂糖とバナナの輸出に頼った英国への経済的従属——を分析している。またそれに重ね、彼のラスタファリアニズム批判を再考している。ガーヴェイは「皇帝」としてのハイレ・セラシエ1世の権威を認めているが、神格に関しては完全に否定している。彼は、自らの信仰から聖書をしばし引用して演説したために「預言」としての印象を与えたとしている。彼の思想から希望を見出すことで、「黒人」としての意識を呼び起こしただけでなく、黒人の「解放の神学」が形成されたのである。ラスタファリアンは「ガーヴェイ」を越えるために「ガーヴェイ」を利用したと解釈出来ると著者は述べている。

また著者は、Rex Nettlefordの議論を引用しジャマイカの産業や社会を分析することで、何故ラスタファリアンが「アフリカ人」としての意識を持ちつつも「ジャマイカ人」としてのアイデンティティを拒否するのかを明らかにしようとしている。Nettlefordはジャマイカにおける三つの主要な産業として、砂糖、観光、ボーキサイトを挙げている。これらは全て共通して外国人に独占されている産業である。ジャマイカは資源と労働力を提供する一方で、その見返りは微々たるものであった。この状況は精神的・肉体的自由の状態にあっても、奴隷時代と同様に経済的依存から脱却していないと言うことができよう。この様な背景から、ジャマイカの中流階級から下層階級の人々にジャマイカよりも外国が優れているという認識が顕著になっていると著者は指摘している。ここでは、「ジャマイカ人」というアイデンティティを持つことが困難で、「信仰」において自らの存在意義を見出そうとした運動の一つがラスタファリアニズムではないかと考える事も出来よう。

第六章では、ジャマイカの大衆文化として現れたレゲエミュージックとその先駆者であるボブ・マーリーについて論じている。レゲエを通じてラスタファリアニズムの神学とイデオロギー

が、ジャマイカのみならず世界中に認知されたというのは確かであろう。著者は、レゲエが果たした功績は、ラスタファリアニズムの復活倫理 (resurrection ethic) と同等の役割を果たしたと評価している。マーリーを通じて、レゲエは黒人の文化芸術として現れ、ジャマイカ社会のマージナルな場における黒人の声なき声に顕在的な力を与えた。レゲエとラスタファリアニズムは類似的な社会状況から生まれ、その社会は過酷かつ無慈悲で、実質的に英国の政策によって統治され運命付けられていた。マーリーは、「Trench town rock」や「Concrete jungle」などの楽曲にジャマイカの社会状況を反映させ、声なき声の代弁者として積極的に曲を作り続けた。ラスタファリアニズムと同様に、マーリーを通じてレゲエはゲッターにおける黒人大衆の物語 (black popular narrative) として現れたのである。著者は、マーリーと共に活動したピーター・トッシュの思想にも着目している。トッシュはラスタファリアンとして、「アフリカに関してどの様な立場にいるのか」だけではなく「どの様にして失った自己を取り戻せるのか」といった問いを、レゲエを通じて発している。どの様にしてJahによって創造された「美しい黒人としての自我」を再発見できるのか。著者はこの問いにマーリーの楽曲*Redemption Song*の歌詞の一部にある「精神的奴隷の状態から自分自身を解放せよ」という箇所がこの問いに答えているという。「自由」とは、ただ単に肉体的束縛からの解放を意味するものではない。マーリーは、独立から現在までの社会状況を、「鎖が足元から思考に移り変わったに過ぎない」と評している。

レゲエは、自己意識は本からではなくむしろ所属する共同体から生ずると示唆していると著者は指摘している。また、彼はアメリカの有名なラップグループであるパブリック・エネミー (Public Enemy) のリーダーのチャックDを引用して、黒人共同体に関する議論を進めている。チャックDは、黒人共同体を創造・維持する三つの重要な要素として、教育、経済、そして執行 (enforcement) を挙げている。これらの要素は、ラップミュージックとレゲエの使命に必要なものであるとしている。著者は、マーリーが教育に関するチャックDのテーゼを支持するとしている。すなわち、大多数の貧しい人々を教化・教育するシステムをあえて信用しないというものである。彼らにとって、教化・教育するエージェンシーが何者であるか、どの様なイデオロギーを植え付けるかということを見抜く力を持つことが重要なのである。

結論では、ラスタファリアニズムの課題と今後の展望について論じている。ラスタファリアンは、「異国の神」をガーヴェイと『詩篇』68章31節などの聖書の記述から光を得ることで、自らの神を選ぶ力を得た。また重要な信仰の基盤を成す「I&I」の意識は、共同体への入信、対話、推論によって形成された。「I&I」を意識することは、救世主Jahとの関係—自らは神の創造物であり、その子供という意識—を知り、その神性を享受していると意識することである。また自己修復 (self-repair) や自尊心の回復には、制度化されたジャマイカ社会から分離する必要性があると彼らは主張している。この様な熱意は、いずれジャマイカの政治システムを通してラスタファリアンのための新たな社会法の必要性を訴えるものとなるであろう。しかしながら、ジャマイカの法領域を植民地主義の継続であるとラスタファリアンが判断し続ける限り、神学的にこれは不可能である。この政治的・社会的領域からの距離は、どれほどアフリカの起源ないし生活様式に基盤を置いているかという重大な問いを発する事が出来よう。著者は、アフリカの宇宙観や人間学は、ラスタファリアンのように宗教的コミットメントと政治的・社会的コミットメントを恣意的に区別するものではないと分析している。アフリカ社会において、聖と俗は分離しておらず、

密に絡み合っている。ここで著者は新たな問いを発している。それは、「どの様な意味においてラスタファリアニズムはアフリカ派生の宗教なのであろうか？」や、「ラスタファリアニズムにおけるアフリカ性とは、エチオピア帰還とハイレ・セラシエ1世の神性によって理解されるのであろうか？」といった問いである。ここで我々は、しばし非公式であるが、ラスタファリアン・スクールや芸術、更にはビジネスといった媒体を通じて、現代のラスタファリアンが一般社会に参加している事を確認しておかなければならない。これにハイレ・セラシエ1世の死以降の、ラスタファリアン神学の変容を見て取る事が出来よう。すなわち「I&I」を意識し自らの中にJahの神性を宿す事で、苦難にある黒人を救済する使命を意識し始めたと言えるのではないだろうか。著者はこの様に分析しているが、この神学の変容に関してはより詳細な研究が待たれるところであろう。最後に著者は、ラスタファリアンの女性観に対し、女性の地位向上のために多大な努力が必要であるということを認識しなければならないと注意を促している。なぜなら、彼らのコンテキストにおける「救済」の範囲に間違いなく女性も含まれるからである。女性もJahの創造物でその娘であり、その神性を宿しているということが指摘できよう。

以上が本書の概観である。著者の方法論として、ラスタファリアニズムの歴史を緻密に捉えなおしながら、その神学と共同体の構造やエートスを人類学的・社会学的アプローチから分析していく方法は適切であると言えよう。また、結論において今後の神学的課題に対して有効な分析が出来ていることも評価したい。ただし批判がないわけではない。著者がジャマイカにおけるキリスト教の布教史に言及する際に、バプテスト派やメソジスト派に関する議論と比較してみて、エチオピア正教会やエチオピア・ザイオン・コプト教会に関する議論が圧倒的に欠けている事が指摘できよう。私見では、これらエチオピア系の諸教会がラスタファリアニズム運動の宗教的実践に与えた影響は非常に大きいと考えるからである。また宗教的実践としてのマリファナについての議論では、聖書の記述から得るその正当性や社会的背景などの分析は詳細であるが、その実践意義の一要素である神秘主義的機能に関してほとんど議論されていない。評者は、「I&I」を意識する際の媒体として、聖書のみならずマリファナ使用の効果も大きいと考えている。ラスタファリアンがマリファナに嗜好品や精神安定剤としての機能のみを追及しているのであれば、その行為を宗教的エートスとして定義するには論理的飛躍があるのではないだろうか。さらにラスタファリアン共同体に関しては、自身のフィールドワークの成果としてのBobo Communityに関する議論と比べ、ボブ・マーリーのバックグラウンドにある「イスラエル十二部族」に関する議論が十分ではなかったと言える。マーリーの文化的貢献に加え、その思想の背景にある信仰共同体を考察することでよりその人物像を把握しやすくなるのではないだろうか。

しかしながら、批判する所はあるが本書はラスタファリアニズム研究者にとって必読書であると言えよう。なぜなら、ただ単にラスタファリアニズムにおける神学に新たな問いを提示するだけではなく、我々にラスタファリアニズム研究の古典の再読をも促しているからである。ラスタファリアン神学の時間的・社会的影響から変容していく過程を丁寧に追うことで、宗教の定義に関する議論や、宗教と世俗主義に関する議論に幾分か視座を与えうるのではないだろうか。また神学の「植民地的地位」からの脱却という姿勢や方法論は、ジャマイカのみならず、他のカリブ海地域や中南米におけるポストコロニアルの宗教事情研究に関しても示唆に富むものであろう。